



## Shinichi Tabei

田部井 進一

アマタ代表取締役社長



## Hisao EdaHIRO

枝廣 寿雄

コスモスマア代表取締役社長

### 顕在化する環境問題、 金融界からの要請、 価値観の変化・・・ 今、脱炭素に踏み込む理由とは

なぜ今、世界は脱炭素の取り組みが一気に加速しているのか。  
田部井氏によれば3つの理由があるという。  
そんな中、コスモスマアが脱炭素プロジェクトをスタートさせた理由とは。

嶺 竜一 = 文 早坂卓也 = 写真

**枝廣** 数年前から多くの企業がCO2の排出量の算定及び削減の取り組みを始めたという実感があります。当社も昨年からアマタさんの支援のもと脱炭素プロジェクトをスタートさせました。今、企業が脱炭素の取り組みを行うことの重要性をどう考えたら良いでしょうか。

**田部井** なぜ今なのか。グローバルな視点で見るとポイントは3つあると思います。1つ目は地球に暮らす私たちが身をもって体感するほど環境問題が顕在化しているということです。地球温暖化の問題、それに伴う水害や火災などの自然災害、水の枯渇、生物多様性の劣化など、因果関係を持って負のスパイラルが目に見えて起こっており、SDGsにも記載があるプラネタリー・バウンダリーでは、4つの領

域ですでに人間が安全に暮らせるレベルを超えていると指摘されています。

2つ目は金融界からの要請です。企業が環境、社会、ガバナンスにどれだけ配慮しているかを評価して投資するESG投資が今や世界の総投資額の3分の1を超えています。またスイスに本部がある金融安定理事会のTCFD（気候関連財務情報開示タスクフォース）は、世界の企業に気候関連情報の開示を推奨しています。

3つ目は個人と企業の価値観の変化です。世界人口が増加し続ける中で、これまでの大量生産・大量消費・大量廃棄というものづくりのメカニズムそのものに問題があるとの認識が強まったと思います。2030年あたりまでにこ

のメカニズムを変え、その先の経済や人の営みをどう維持していくかに今世界が全力を注いでいます。2040年までに全世界で7370兆円が脱炭素に注ぎ込まれると言われていました。

**枝廣** 日本における脱炭素の取り組みはどうなっていますか。

**田部井** 日本ではグリーントランスフォーメーション（GX）を推進しようという企業群が一体となり、CO2削減に取り組むGXリーグという動きが2022年に始まっています。また日本政府は日本の地方自治体46箇所を脱炭素先行地域に認定して支援したり、2023年度から公共工事に使用する原材料にはCO2排出量の提示を義務付けるといった政策を行っています。ただ、建築業界はサプライチ



未来のウェルビーイングを作るために  
今をきちんと知る必要がある

BE MORE.

ここでアクセルを踏み、我々が自ら  
一歩先に進んだ姿を示すことが重要

たべい・しんいち ©2004年アマタ（現：アマタサーキュラー）に入社。関東地区の製造工場に向けたリサイクルの営業、企業の環境戦略支援といった本社向けの営業、川崎循環資源製造所の立ち上げ、ICTサービス「AMITA Smart Eco」の開発などを行う。2019年からは企業のサステナブル経営を推進するためのソリューション提案の営業、実行部門のグループリーダー、2020年からは営業部門所管の取締役を務める。2023年1月、アマタ代表取締役社長に就任。

えだひろ・ひさお ©1985年リクルート入社と同時にリクルートコスモス（現・コスモイニシア）に転向、その後転職。企画、営業部門などを経験し、中でも事業用地の仕入及び事業企画の企画開発部門が長く、横須賀のニュータウンの事業企画など大規模物件に携わる。リーマンショック後は企業再生・資本施策の責任者を務める。2017年6月、現職に就任。2019年4月よりCSV戦略室長を兼務。

チェーンが長く複雑であることもあり、CO2算出と削減は非常に大変です。私からも枝廣さんにお聞きします。コスモスマアはなぜ今、脱炭素の取り組みを始めたのでしょうか。

**枝廣** まず、コスモスマアが所属する大和ハウスグループ全体の方針がありました。大和ハウス工業はカナダの出版社コーポレートナイツ社が選定する「世界で最も持続可能な100社」に度々選出されており、社内に環境対策とサステナビリティ推進に対応する2つの部門を作り、環境および社会課題の解決に積極的に取り組んでいます。外側に目を向ければ、建築業界においては1年以上前から、多くのデベロッパーから建設会社に対してCO2排出量の削減を求める声が出てき

ています。そうした環境にある中で、当社も脱炭素を進めるべきだとおよそ1年前に考え、取り組むことを決めました。実は当社は、14年前から、オフィスの構築時における電力や運送費用などにかかるCO2排出量を算出する「eco-to（いいこと）オフィス」というサービスを提供しており、考え方のベースがあります。

**田部井** 昨年、竣工した建物やオフィスに対してCO2排出量の算定をしたわけですが、振り返っていかがですか。

**枝廣** やはり一から手作業で算定を行うことの大変さは身にしみた部分はありますし、これからルール作りをしたりシステムを導入するなどして効率化を図る必要がありますが、そ

れも簡単ではありません。ただ当社も10年以上、全社的に環境や社会に取り組んできて、全事業においてCSVを推進し、ほぼ全員がエコ検定を取得してきていますから、社員の意識はゼロからのスタートではないと思っています。

**田部井** 私も1年間CSV戦略室のメンバーと一緒に仕事をさせていただいて意識の高さを強く感じました。

**枝廣** 現場のメンバーもクライアント様からさまざまな生の声を聞く中で、これからは脱炭素の取り組みが競争軸に入ってくると感じていますし、私たちがあえて入れていくべきだと思います。お客様に選ばれる存在になり、将来の成長に繋げるためには、ここでアクセルを踏み、我々が自ら一歩先に進んだ姿を示すことが重要であるということについて、社員にも一定の理解はしてもらえることだと思っています。

**田部井** 確かに私どもから見ても、今、環境への取り組みを先行して行ってサステナビリティに関連する市場を作っていくという会社と、今は少し静観をして市場ができてから取り組もうという会社に、二極化しているように感じます。1年間の成果を振り返って今回のプロジェクトをどう評価されていますか。

**枝廣** 私たち自身がサプライチェーンの中でどこがCO2の排出量が多く、何を変えたら削減できるのかといったところを可視化することができたのは非常に大きな成果でした。今後、算出も削減もサプライチェーン全体で行わなければならないので、社外を巻き込んだ仕組みづくりが今後の課題になります。現場でクライアント様から直接的に「CO2排出量の計算書をつけてほしい」「CO2をここまで下げてほしい」といったオーダーが明確に入るようになるまでまだ数年かかると思います。ただ、我々の方から「ここはこういう低炭素素材に変えたらこれだけ下がります」「新築ではなく既存ビルのリノベーションにすればこれだけ下がります」といった提案ができるようになれば、そのタイミングを早めていけるのではないかと思います。

**田部井** 私は、CO2の算定というのは過去や現在の話で、サステナビリティというのは未来の話なんだと思います。過去と現在をきちんと調べて、そこを出発点に未来のウェルビーイング（幸福）をどう作っていくのか、私たちは何にどう貢献していくのか、この順序を間違えないことが重要だと思っています。📍